

猿石をめぐる造形の世界

(日吉・山王の猿を追って)

Visual Aspects for Stone Image of Monkey (Hiyoshi-Sano Religion and Monkey as Messenger of God)



スラウエシには
黒色のムーアモ
ンキーが生息
する。
中部スラウシの
ハダ地方の石
造遺物の中で
見たこの像を現
地の人びとが
猿石と呼ぶ点
に注目したい。

バダの石猿 (スラウシ島)
賈鍾寿氏撮影 (日本環太平洋学会々員)

目次

- I はじめにーアニマル・ロア発掘
- II 古代人のサルへのイメージ
- III 飛鳥の猿石のイメージ(マツシブ彫刻の世界)
- IV 猿石をめぐる文化
- V 都市聖域におけるサルのモチーフ
- VI 日吉神社の調査から
 - 1) 山王の猿石発見
 - 2) 日吉神社の猿を尋ねて
 - 3) 石のサルの考現学
- VII おわりにー文化としてのサルのイメージ

広瀬 鎮

I. はじめに—アニマル・ロア発掘

1992年は壬申（みずのえさる）の年である。

日本列島ではこの60年に一度まわってくる十干十二支（えと）のなかでも、申年にかけての新春奉寿の祈願をもって、さまざまな場面に「猿」が登場した。新年を祝う民族的習俗ともいえる賀状にも申たちが、出現した。

数多くの文字、映像文化情報のなかにサルたちが登場したが、国民の多くが、それに大きな異議をとなえることもなかった。我国の大衆社会における生活文化の特色ともいべきこの大衆受容のイメージ・コミュニケーションに強い関心を長年もちつづけているのであるが、本論では、日本人とサルをめぐる アニマル・ロア研究の一環として、日本民族におけるサルのイメージ受容の

II. 古代人のサルへのイメージ

日本における動物をめぐる造形の歴史は、縄文～弥生期の古代人の営みにその多くが、生活具としてあらわれる。しかも古代人の心を表象する呪・訴・禁などの祈願と深く係わって自然への思い入れが、形となって残されている。もっとも彼等の心そのものは、記録がなく、限られた感覚の分野を通じてのみしか伺いしることができなかった。しかし近年さまざまな工学機器、測定器、記録手法が、エレクトロニクス、コンピューター等により文字化、映像化がすすみ、古代学の発展に大きく働らきかけているなかにあって研究の多様化が進められている。

また、今日に残された文化遺物、残留物によって多種におよぶ解析の結果を総合化してみることができるようになったことから、人間の見たり、感じたり、思考する実態が、巾ひろく把握できるようになった。そこで本論では、日本列島に残留し、伝承等も付与された古代から今日に継承された、ニホンザルのイメージ造形物についての分析的考察を試みることにした。勿論、文字や、絵画、彫刻その他の造形物や伝承も多種にわたってその所存や、継承の実態が明らかとなっているサルの文化残留のうち、自然石ならびに石刻のサルに限って、本論ではとりあげてみたいと考えている。

全国にわたってのこの種文化物の残留がすべて明らかとされているわけでもないし、まだまだ多くの文化遺跡の中にサルが埋没しているものと考えられるのであるが、ニホンザル民俗調査の途上めぐりあった石のサルをめぐ

文化的性格につき以下に考察を試みる。本論は、申年ということもあって「申」の出現する寺社等が、全国各地で話題となり、マス・コミ取材等に係わったこともあって、民間信仰に、何らかの形で、係わった「猿」をとりあげ、とくに、サルをモチーフとした造形の世界に焦点をあて、人びとにとっての「猿」のイメージの本質に迫まるものである。1980年以降の継続調査・聞き取りによってその石像物の性格が判明しつつある岐阜県下丹生川流域出土の猿石をめぐる考察をふくめ、アニマル・ロアの発見の推移過程についても論述・報告をしたいと考えている。

る造形上の特色について考察をすすめる。本論は、その中でも、日吉・山王というきわめて、自然と係わりのふかい神社信仰にことよせたサルの造形物をまずとりあげてみよう。

もっとも、古くからの山王社にせよ、近年勧進され、あらたに造営された日吉神社においても必ずしもサルが登場するものとは限らない。むしろ新しい日吉信仰には、サルがわすれ去られている例にも出合ってきた。

滋賀県坂本にある日吉神社の勧進をえた、三重県員弁郡藤原町にある鳴谷神社の一對のサルの石像は、社殿奉供のものではあるが、サルのもつ畏敬性への接近がみられる。ニホンザルの姿を忠実にうつして、座像であ



図1) 山王さん、日吉さんの神社にはいろいろなサルが祀られていてにぎやかである。愛知県西春日井郡清洲町日吉神社のサルの銅像

るが、躍動性のみられるものであり、サルの表情は、リアルな自然性を示している点に特色がみられる。明らかに、この一対のサルの石像は、神社にとっての守護役を十二分につとめていると思えるのである。

このことは、愛知県下西春日井郡、清洲町にある日吉神社境内にみられる青銅製の烏帽子サル像の一対にもみられるのであって、サル像は、明らかに神社の守護をつとめる使徒・神使としての役をつとめているのである。しかしながら、このようなサル像も、社域内での設置位置や、設置後の祭礼との係わりで、神に近い存在として、まつられるような事態がおこってくる。サルは、次第に山王の神の愛すべき信仰布教のメッセンジャーとなって行くのである。日本人にとってのサルは、古くからの畏敬と神性への愛着から、まことに巾のひろい信心の仲介者としても機能するようになるのである。日吉神社三輪宮司からは、氏子中の信者からの特に石工につくらせた猿の石像が、報恩、神威発展を願って寄進された事情につき伺うことができ、地域社会の住民と深くむすびついた信仰の動態を知ることでもできたのである。

山王が、過去において、強力な神・仏習合のうえで、その信仰のひろがりをみたことから、サルは、大きな、信仰融合の橋わたしをしたものと考えられてくる。

したがって今日の残留石像の猿には、神・仏の豊かな

融合に役立ったサルたちの姿態が随所にあらわれているのである。猿像についてみれば、座すること、神宝他の神への接近をいみするもちものをもつ、そして、サルそのものの謙虚な自然の姿をいつまでも明示しつづけているのである。

これまでに知見をえた民間信仰と係わったサルの石像の例では、庚申塔上の三猿や、庚申信仰とむすびついた三猿像、そして諸祈願と係わったサルの石像などが、印象にのこっている。だが、より原始的形態ともいべき石猿が、岐阜県下丹生川村に出土していたのである。筆者は、この石のうえに刻印されたサルらしい顔の石を興味ふかく調査したことがある。もともと顔を現す刻印のみではサルと断定しがたいものが多いのであるが、岐阜県下に出土した「猿石」は、縄文・弥生の複合遺跡からの石像であって、発見者坂本重次郎氏によって、その地の地域からの石材によってつくられていないという証言をえているので、他の地からどうやらはこびこまれたもののようである。ただこの猿石が、何のためにつくられ、いかに祀られたのかについてはいまだはっきりとしないのである。残留した石像がサルであることから、何らかの意味での呪術性をもった祭祀物ではないかと考えられてはきているが、猿石や石に刻まれたサルらしき表情をもつ小石は、いまだにその祀られ方などについてはよく

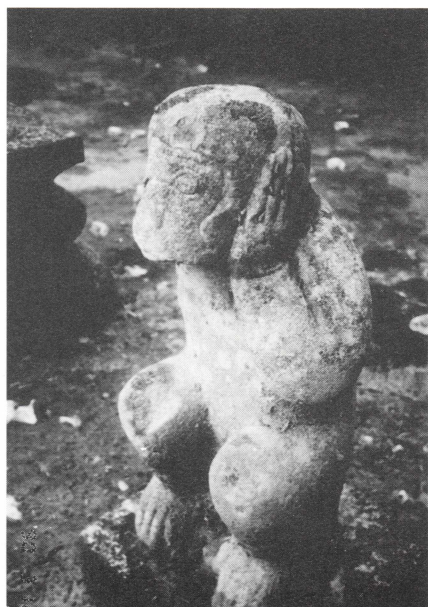


図2) 出所不明、石像のサル(貴生川町にて)

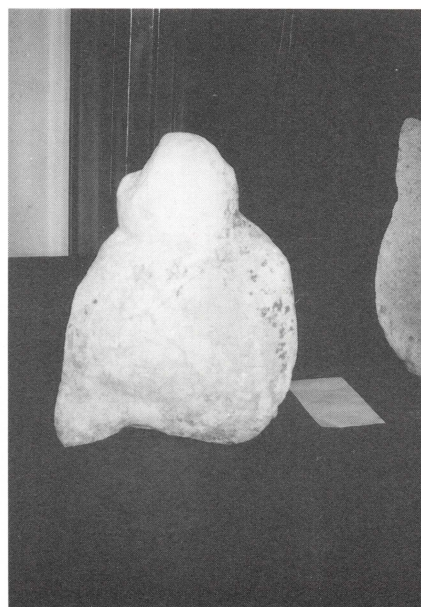


図3) 猿石 飛騨民族考古資料館蔵 丹生川域出土 (明らかに人工の加えられたもの)

わからないのである。

古代人が意識的にサルをとらえ、サルのイメージを表出したその真意は、今日では推測の域をでないのである

III. 飛鳥の猿石のイメージ(マツシブ彫刻の世界)

“環太平洋のマツシブ彫刻”を論じた小川光暘氏(環太平洋学会々長)は、原始マツシブ彫刻について考察を試みている。「環太平洋文化」誌は第3号(1991)において、特集を行ない、スラウシ島、ジャワ島、済州島、等にみられたマツシブ彫刻の実態について報告を行っている。ヒトか、サルか、その弁別のうえに立ったイメージ判定からいえば、その多くは明らかに人像であり、受容イメージとしては、サルとはいい難いものが多いのであるが、スラウシ島でみられた賈鍾寿氏撮影になるバダ(スラウシ島中部)の石獣は、水面下の部分が不明であるが、イメージとしては「サル」であり、スラウシ島は、クロザルの生息地である。しかも同氏の同島における調査石像の一つに「バダの猿石」と猿の名称も見えており、同氏のイメージ判定により、猿石が発見されたことになる。もともとヒトとサルは、イメージ認知の上では、その表現手法にもよるが、区別し難いものであるが、同氏が猿石と名称を付す根拠は、発見した石像に対するイメージに対する知覚によるものが大きいといえる。このように考えると、奈良県飛鳥でみられる高取山の猿もその形状が直立の姿像でないことや、異様な目の大きさ、額のしわなどの印刻によりヒトよりもサルをイメージさせるに足るものである。

同氏によれば、飛鳥には猿石や石人男女像があり、日本の彫刻史の中では異様な存在であるとし、“韓国の南部地域にも石長柱や済州島の石・爺トヘトバンなどがあり、日本のこれらの彫刻と非常に似た雰囲気をもっている”とのべ、ユーモラスな顔、素朴なマツシブ彫刻の特徴についてふれているが、韓国におけるこの種の彫刻の源流は、いまだ追及されていないと述べており、むしろ日・韓の遺存マツシブ彫刻の源流さがしに関心を寄せている。なお賈鍾寿氏の1991年5月以降のスラウシ島の調査は、新たな関心を呼ぶものであった。上述の猿石の発見された、スラウシ中部のバダ地区は、同氏によっても巨石遺物が多く、石人像が残留している地区であるが同氏の考察のよ

が、縄文期、弥生期のそれぞれの時代の日本人の祖先と野生ニホンザルとの間の人獣交渉を物語るものとしてとらえたいと考えるのである。

うに、石像の多くはヒトを表わしていると考えられるのであるが、何故か、「猿石」とみなされた石刻像が、出現するのである。残念ながら、地区住民の信仰や、習俗、伝承等が、いまだ報告されておらず、これら石像をめぐる地域住民の詳細な歴史的信仰観は不明である。今後の調査によってより明確に、猿石が、石人であるかどうか判明するものと期待している。

本論にみられるごとく極めて限定した、サルをめぐる日本の民間伝承や、民間信仰習俗と係わった領域でのマツシブ彫刻をとらえる場合においては、かなりヒトかサルかの判定が容易となるのであるが、環太平洋地帯における石像物、マツシブ彫刻にサルを見出すことはむづかしい。しかしながら、地域住民の動物観等の調査が進められることにより、イメージとしての表現の根底にある認識をさぐり出すことは可能であると考えている。

マツシブ彫刻における日本の猿石につき小川光暘氏は以下のごとく述べている。“マツシブな彫刻というのは、一口でいえばズングリとした同時にどっしり重みのある彫刻のことである。(中略)いわば一塊りの彫刻といった印象を与える場合が多い。そして歴史的にみると多くの世界の原始芸術の中にこの種のもが見出される。日本の場合でいえば縄文時代の岩偶や、土偶の中にこの種の



図4) 縄文時代の人面石 岐阜県大野郡根方遺跡出土
飛騨民族考古資料館蔵(高山市)



図5) 縄文時代 猿面石 飛騨民族考古資料館蔵

ものがみられるが、その後の埴輪彫刻とか、仏像彫刻の中にはほとんど見出されなくなっている。”とのべている。例外的な遺物となったのが、飛鳥の猿石である。こ

IV. 猿石をめぐる文化

筆者は、自然石であれ、造形として彫出されたものであれ、明らかに多くの人びとに一見サルだとわかる石の存在について長く関心を抱いてきた。土焼きや、木彫の世界にも無数のサルが出現する。大小をとわずサルをモチーフとした文化物はことの他1992年の申（サル）年には多種多様に巷間に現われ、人びとの目を楽ませているのであるが、本論でとりあげるサルは、すべて石の世界のサルである。我国にも孫悟空の物語りとして伝えられる「石猿」伝承は、中国における「白蛇伝説」に端を発する民間にひろく流布された物語りであり、石からサルが生まれ、この神通力あふれるサルの働きか三蔵法師の西方天竺への経典を求めての旅に大いなる力を与えたという物語りも、実は、サルという生きもののもつ自然性や、霊威力を期待したからに他ならない。

すくなくとも、サルが石でつくられる、石のサルは、いろいろな造形物の中で、かなり意のこめられたものと考えられる。歴史的文化的人類のアニミズムに近いサルへの思い込みがみられるのである。

かつて、我国にやってきた「ミッシングリングの謎」で著名な南アフリカの人類学者レイモンド・ダート博士は筆者に、赤いこぶし大のまるくひらたい石をみせてくれたことがある。アオストラロピテクス発見の地に

の飛鳥の猿石については今日まで多くの研究が古代学研究面からなされているが、一塊の自然石をオブジェとして顔、手足をほりだし、いずれもが坐像である点に特徴がみられる。石加工の石彫像は、日本各地に存在しているのであるが、飛鳥石像のごとき原始的マツシブネスを感じさせる物はないと小川光暘氏はのべているが、この点が重要であり、原始性イメージこそが、日本人に「猿」をイメージするものといえよう。日本人がサルをイメージする場合には、この原始性とさらに、異質性、とくに異民族、外来のものといった渡来イメージと認識とが係わるものと考えている。飛鳥猿石がいかに人もくさく、異様な形相であれ、今日にいたるまで猿石と称せられ、しかも地元民によって「庚申」として繁殖・繁栄の祈願対象とされてきたことは、重要な点と考えざるをえないのである。

見出したその石は、人面石であり、博士は大切にしていた。博士にとっては、この石にきざまれた顔が、ヒトであるかサルであるか以上の関心、すなわち、サルとも人ともいまだ判定のつかなかった原人がこれを作ったとすれば、ヒトのイメージ、サルのイメージを認識し識別する文化観念の発生をそこに認めその点が気がかりであったに違いない。

今日、日本列島にのこされているサルともヒトともつかない石造物について、その姿・形が明らかにサルを目してつくられたもの、また、たまたま偶然に、人為なきなかにあってサルにみえてしまう石塊や、石片を、現在まで、何らかの日本人の信念と係わったとみられる残留物のなかから考察を試みてみよう。

本調査は、いまだ緒についたばかりであり、とりあげるサル石もその数、調査例数も、乏しいのであるが、とくに今回は、山王・日吉とよばれる信仰に関し、サルが神の使いとして考えられてきた民間伝承と民間信仰に係わるサル石のみを対象としてとりあげてみた。先述のごとく、古くから飛鳥地方にのこされてきたサル石（欽明天皇陵古墳に近い吉備姫王墓に配置されている4体と高取山中腹にある1体の石像）も「山王」とよばれ、地域の人びとの安産や多幸祈願のものとして伝えられる。^{図6)}



図6) 飛鳥の猿石(マツシブ彫刻の例) 吉備姫王墓の四体の石像の一つ

だがその形状は、必ずしもサルという動物の姿ではなくあくまでもヒトの姿であるが、その容貌の特異さや形態のユニークさから異なるヒト、すなわちサルとして、

V. 都市聖域におけるサルのモチーフ

現代都市は多様な文化機能を拡大しつつあるがその中において都市空間における聖域も変革期にいたっている。公園、駅、市場、広場等の空間には、おびただしい情報発信の装置が付加されている。動物は格好のメディア素材である。なかでもサルは、伝統あるコミカルな、発信

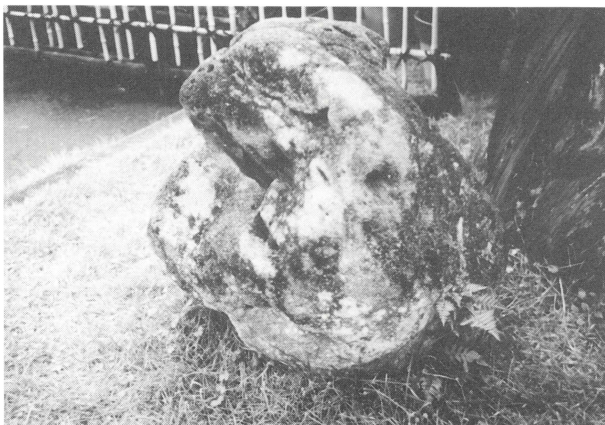


図7) 猿石 日本モンキーセンター猿二郎館蔵 コレクターは自然石にサルを発見した。

考えられてきたものであろう。筆者は「猿石」の名称に一段とこだわらざるを得ないのである。

サル石、そのものの謎は、今日なお古代学研究、考古学研究の話題となり、無限の興味をひく。とくに近年、環太平洋学会の調査そして辻 維周氏(同志社大学)他のジャワ島・バリ島等のヒンズー教遺跡からの発見像と飛香サル石との酷似形態から、その祀られ方をふくめて、多大の関心をよびはじめている。バリ島および、飛鳥猿石の相方の石像が、繁殖生産、安産祈願と深く関わっている伝承の残留こそは、重視されねばならない点なのである。石には古代人が生命を強く感じ、そのアニミズムの世界観は、石によってつくられたサルへの原始観念の残留をみるのであるが、本論は、特定の我国の民間に流布した信仰観念として山王・日吉の神使性のサルに焦点をあわせて論述をすすめよう。

サル石をめぐる文化論は、今日に継承される観念の正確な把握が必要であると同時に、総合的な調査、石像の物質的素材や彫刻技術、文化接触、設置や移動の位置など、多様な文化事象との係わりの考察なく進めることは不可能であると考えている。

状報をつくり出す役割りを果しているのである。

愛知県犬山市にある財団法人日本モンキーセンターにある猿二郎館は、故岩崎昇氏(豊沢猿二郎)のコレクションが、ざっと10,000点余も収集されている。一般公開されているなかでサルの人形、玩具類にまじって同氏が発見



図8) ニホンザルの母と子(京都嵐山自然遊園地にて) サルたちの優しさ行動も又生き物の文化性が認められるようである。

した猿形の自然石や、加工された猿石などが数十点展示されているが、これ等はあまり人目をひくことがない。^{図7)}それは展示方法によるのかも知れないが、一般向きではないからであろう。しかし「猿浴みの地」のなかの自然石は、いかにも水浴中のサルが首をもちあげている姿にみえ、丁度、長野県地獄谷温泉でのニホンザルの温泉浴の姿を髣髴させてくれる。

これは、コレクターが、モンキーセンター敷地内を散策中にみつけた黒色のすべすべしたひとかかえもある石を、なに気なくひっくりかえしたとたんに「猿」があらわれたという、云伝えがのこされている。^{図8)}まったく偶然にコレクターは、サルの姿をこの石にみい出したのであるが、興味ふかいことに、私どももこの石の据え方によってまちががなくサルを連想させられるのである。

猿二郎館には、大・小ささまざまなサルの顔や頭、そしてサルの形態にみなされたサル石が残されているが、なかには、これがサルかともうたがわれる姿石もまじっているのである。コレクターの心意にサルが投影されたものとして、認められている。このような、コレクターの思い入れは、二かかえもある大きな礫岩の岩塊にみられ、猿二郎館正面に展示されたことのある猿岩が存在する。この岩は、見る者の角度によって、吻状の部分や、鼻眉の部分にサルに酷似するのであるが、確かにサルの頭部をイメージさせてくれるので、したがってこの館を訪れる見学者の多くもこれに気づき、納得しているのである。

岩崎昇氏の異常なまでの「サル好き」は、さまざまな「物」の世界に、モンキービジョンの追跡がみとめられるが、終生、文楽の三味線師であり、旅にあけくらし生涯のうちに、訪れた諸所の自然環境や、都市において絶えず「サル」の発見にせまった執念のコレクション活動は、単なる趣味者の好奇心として片づけられないものがある。これは、日本人の動物観の現われとして、日本人の動物への態度を探る認識文化人類学調査研究の課題となっているのである。

コレクターの大事にした蒐集石造品のなかに、御幣を抱いた山王石猿があるが、この石像は出所等全く伝えられていない。だが生前から、この猿像を自宅中庭の中心に置き、絶えず、何かを語りかけるように凝視する様子に接した筆者にとっては、この石像猿とコレクターの間に存在していた情念のようなものに深い関心を寄せるの



図9) 御幣をかざくサルの像(山王神使像) 桃山期作と伝えられるサルの石像。—日本モンキーセンター猿二郎館—

であるが、残念ながら、明らかとすることはできなかったのである。

都市空間におけるサルの姿を石像にもとめて探索をした1970年末、東京都内中央区でみい出した真黒なサルの石像は、山王社や庚申社、庚申寺という社寺境内とことなっていて、異様な思いにとらわれた。サルと係わった民間信仰が、さまざまな造形物を創り出し、多くが、寺・社に奉納され、それ等が、残留しつつけていることは衆知のことであるが、日本橋の関東大震災慰霊塔建立地内にぼつねんと残され、忘れ去られていた石の猿は、明らかに、震災のあおりをくったものかも知れないし、再度の災害ともいえる第二次大戦下の東京空襲に係わったものかも知れない。今日、筆者の記録した写真を見ると、サル像前面の欠損部分に、少額銭の奉讃がみえる。都市民の誰かが、賽銭をあげ供養の心を示したものである。

痛ましいサル像は、見る人々に万感の思いをもたらせるのであり、このようなイメージ・コミュニケーションの機能を無視できないのではあるまいか。

このように、都市空間に発見できる猿の石像とは、対象的に、その形状から、その機能からもサルとよばれ、大切にされた生活具(民具)が、先述のコレクション館に収蔵されていることはあまり人びとに知られていない。この「サル」という石は、福井県下の山村に土地の石材である笏谷石でつくられた高さ15センチばかりの人差指の先の方をぐっとまげたような形の石がそれである。これは、いろいろ端において、自在かぎにつるした鉄なべのバランスをとるための錘である。この石を入手した日本モンキーセンター宮地伝三郎所長(故人)は、猿二郎館

にもちこまれたのであるが、なかなかおもしろい石で、鉄なべのかたむきを直す、バランスとりのためとはいえ、なべのフチにこのサルがかけられると、まるでサルが木にとまったようにみえるのである。このような民具に関して、コレクターの岩崎昇氏は、酒造関係者が、酒しぼ

りの重りにする「猿石」も、忘れることなく収集していたし、サル年うまれの人びとの守り本尊とされる大日如来石像までも、収集の対象としていたのである。都市文化装置ともいべきサルの博物館に資料としてこれらが収蔵され、公開されている点は意義深い。

VI. 日吉神社の調査から

1) 山王の猿石発見

日本における神・仏の混肴は、比較文化の研究のうえでは大変重要な研究課題であることは云うまでもないのであるが、アニマル・ロア（動物と人間との文化的交流の民俗）研究の立場からみると、人獣交渉の文化事象のなかで、神や仏の使徒獣、神使や仏徒ともみなされたサルという動物の、日本における民間信仰とのふかい係わ

りあいとはまことに興味ふかいものがある。筆者は1970年来、日吉・山王系神社におけるこのサルの出現をめぐって今日の文化残留と、引つづき、信仰と係わり出現しつづけるさまざまなサルに係わる文化物の調査を試みているのであるが、とくに民間信仰の普及に際してこのサルがさまざまな働きを果してきた多くの事例を知見した。^{図10)、図11)}1992年が壬申（みずのえさる）の年であることもあって、おびたしいサルにちなんだ文物、芸能、そして宗教儀礼等がみられるのであるが、ここでは、神符や、絵馬、御札、お守り、土鈴などの信仰玩具の世界をはなれて、とくに日吉・山王社を中心として、サルが、姿として現われる石造物をめぐって、そのマツシブ彫刻にみられる芸術要素その他、イメージの性格についてとりあげることにしよう。^{図12)、図13)}調査開始当時から、神社・仏閣その他にみられた石像のサルはその形状の大・小はあるが、すくなくとも造形上の特色としてサルの表情や、姿態に、さまざまな差異がみられ、とくにニホンサルではない外国産サルの石像サルを見ることには大きな驚きを覚えたものであるが、その後調査の進む過程で、日本人の動物観、サル観には、歴史上の認識のちがいのあることも

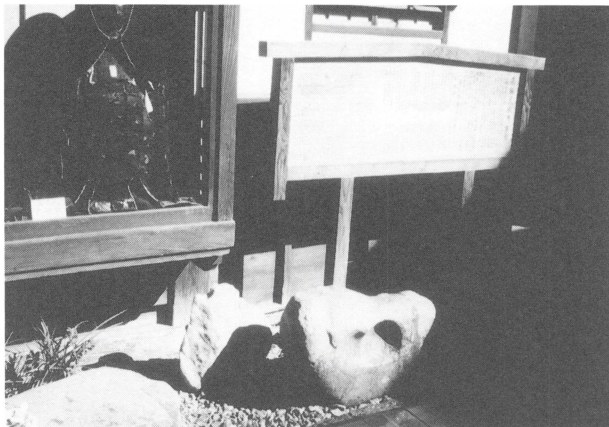


図10) 猿石が飛騨民族考古資料館入口に展示されている
(左側の石) 岐阜県高山市

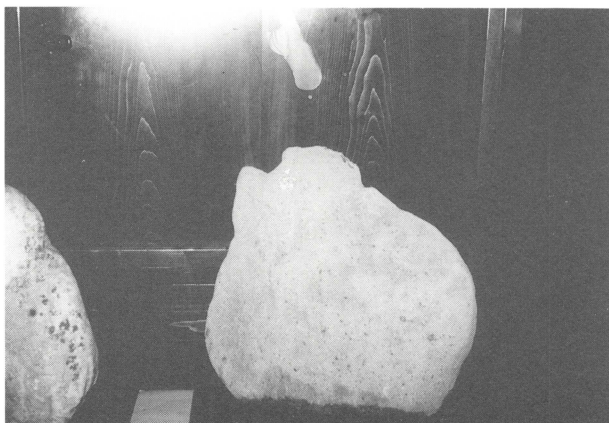


図11) 猿石 岐阜県丹生川地区 縄文・弥生複合遺跡出土
(飛騨民族考古資料館蔵)



図12) 熊本県玉名町 木の葉 山頂に、秋葉信仰の小社があり、そこに、ひっそりとまつられていた石の三猿をみ出した。民間信仰との係わりは不明である。(熊本県下玉名町)

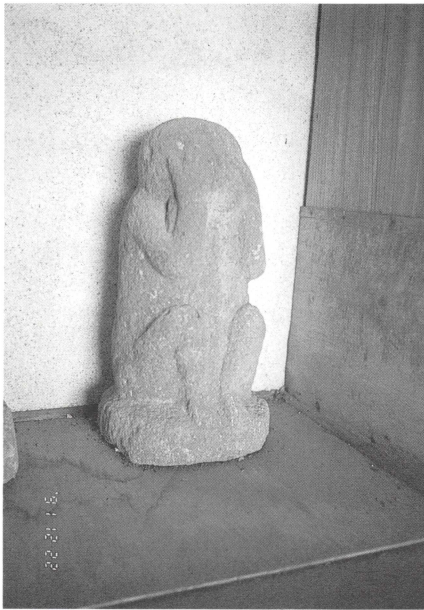


図13) みざるの石像(高30cm) 木の葉山山頂の社にまつられていた三猿石像の一つ。

判明してきた。我が国土におけるニホンザルの生息や、生態研究の近年の著しい発達と、動物知識や認識の変化とは大きく係わって^{図14)}もいたのである。

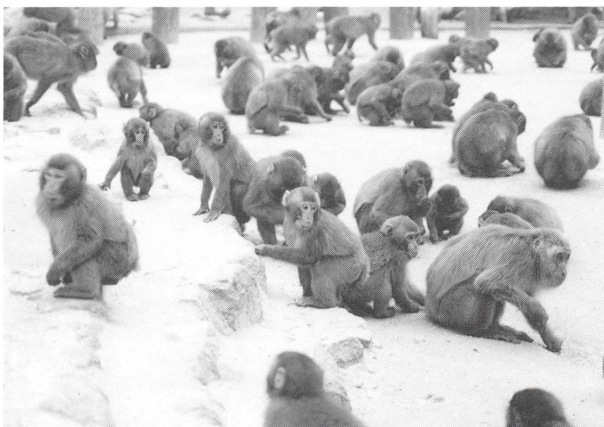


図14) ニホンザルはムレをつくる。高崎はニホンザルの王国である。サル^{図14)}の行動から学ぶことは多い。高崎山は自然史博物館。

筆者は、1970年滋賀県大津市にある日吉神社におけるモチーフとしてのサルの出現をめぐり調査を試みたが、社域内における「猿石」と称せられる自然石をのぞいて、ことさらに創造された石像猿をみることがなかった。もっとも護符や、お守り、木彫山王猿像、猿面、絵画、土焼き人形猿などを催事のおりに見聞するのであるが、同社には、石川県小松市の本折日吉社や、愛知県西春日井郡清洲町日吉神社のごとき奉納石像猿をみない。この

ことは、かなり重要なことであって、必ずしも山王に、サルが登場するものと特定することは危険なことといえよう。

サルが尊像として登場してくること自体には、使徒獣性をはるかにこえた神格視された存在となっているようにもみえ、時として神威鼓舞とも係わるようにもみえる祀られ方にまで至っている場合がみられるのである。

九州地方国東半島周辺や、九州北東部周辺地区で訪れた日吉神社には、明治期に奉納された、天然痘厄けの祈願物となったサルの石像が多く^{図15)}のこされていたし、山王社以外の民間信仰としての庚申寺には三猿像他多くの石像がのこされている。そのなかに奉納されたサル像の尾が長く明らかにニホンザルとことなるサルの姿が残されていたのである。ところが、このような例は、石川県、岐阜県、福井県下の日吉神社においてもしばしばみ出されているのである。

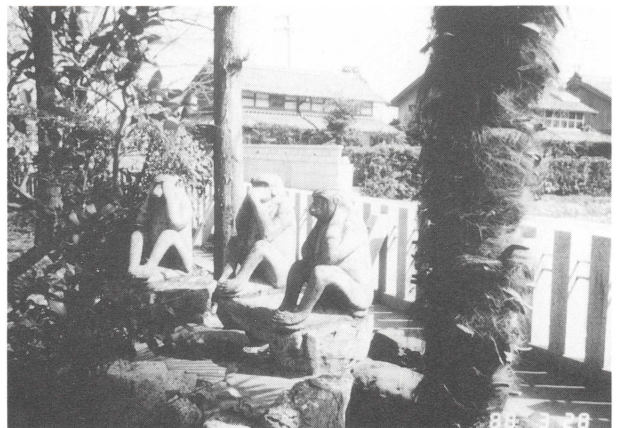


図15) サルの尾がいずれも長くて驚かされる。岐阜県神戸町 山王社三猿

もともと尾の長いサルが画かれたり、造形される例が、ニホンザルを対象として随所^{図15)}に出現することに霊長類研究者も幾度か問題を提出しつつきてきている。ニホンザルは、尾のみじかいサルであり、日本個有の信仰である日吉・山王の使いはニホンザルであると日本人の多くがイメージしてきたのであるが、実際には、奉納石像猿に、外国のサルである尾長ザルがつくられていたのである。しかし、このようなことに、いちいち目くじらをたてる者もなく、半世紀以上の年月、厳然と境内に鎮座しつづけているのである。日本人のイメージ文化受容におけるこだわりのない巾のようなものを知らされるのである。

しかも、石像はしばしば地藏崇拝同様の錦布がかけられたり、供具を供されてもいるのである。尾の長さにこだわることなくサルとして祈願者を受け入れるサル石像も、自然石で猿状のものに、しめ縄がはられ、霊像にしたてられたサルの石像に出合う度に、石像のサルによせる人びとの多様な祈願が次第に明らかとなってきたのである。日本人の多くは、民間信仰に係わったニホンザルに何等かの形で、自然性をシンボリックに意識している面がみられるのであり、山王の猿は、とくにその観が著しいと考えている。

2) 日吉神社の猿を尋ねて

近年、筆者は、東海地方を中心として、全国の山王・日吉社を探訪し、聖域にみられる「猿」について調査をすすめているが、全国に、3000をこえる日吉・山王社の

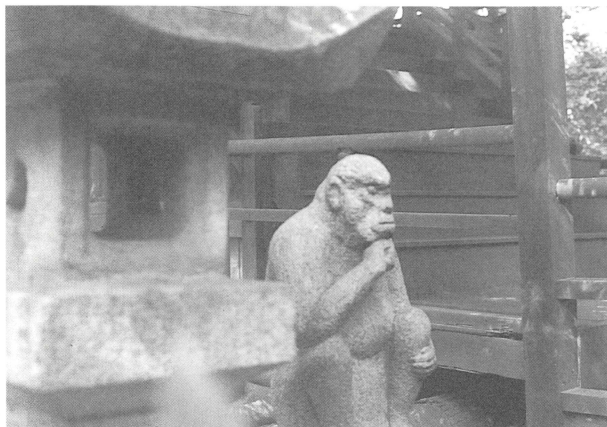


図16) 日吉神社本殿内にまつられるサル石像 (愛知県清洲町日吉神社)

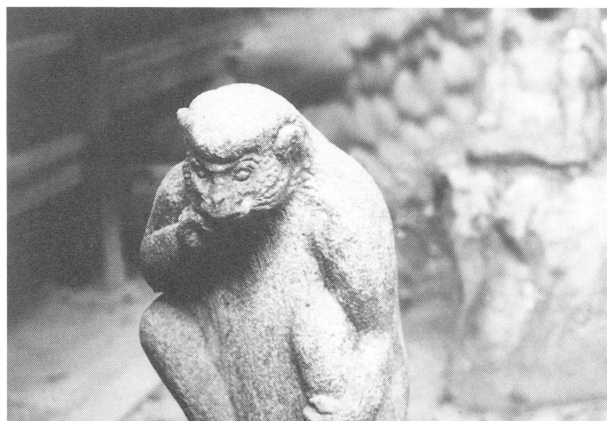


図17) お山王のお使いザル。幸せをねがうサルの石像を奉納する人びとは今日でも多い。(愛知県清洲町日吉神社)

すべてを悉皆し盡すには至っていないのであるが、地域社会における民間信仰は、近代社会の都市化ともなう共同体の解体以後、あらたな地域社会の編成と係わる点に注目している。現在の調査域である清洲地区に目をむけてみよう。

愛知県下西春日井郡清洲町にある日吉神社、そこには丹羽金松、つる子夫妻から奉納されたサル石像が1対、本殿社屋内庭に安置されている^{図16)}。また、長男丹羽藤雄氏は、後年岡崎の石工になるサル石像を一对、神社に奉納し、功德を謝している。二対4体のサル像のいずれもが、丹羽家からの、神恵への報讃、感謝として奉納されている点が、著しい。丹羽つる子氏からの直接聞取りによっても、日吉の神威への敬意のほどがよく伺えた。そのこともあってこの岡崎石によってつくられた石像は、姿・形に、重々しき、威厳が感じられる。これらの猿石像は、聞取りにより三輪康裕宮司の父、先代の宮司により現在の位置に設置されたことが判明した。これ等の石像は、この社にみられる、ブロンズ猿像、威儀を正した二像が、拝殿前に、そして樓門屋根の四隅に瓦猿、絵馬にえがかれた三番叟ザルなどのいづれよりも立派であり、威圧観のみられることは注目されるべきであろう。

この日吉神社は、祭神に大山咋神、須佐之男命、大己貴命を祀るが、五穀豊饒、鬼門守護、方除け、魔除けの守護、また天災、疫病等の祓除け、さらに人造り、国造り、医薬、夫婦和合等のもろもろの願いに対応した神霊を抱いてきたのであるが、神社境内に「子産石」が、出産祈願と係わって安置されている。石像物に対する崇敬が、石像の猿以外にもみられたのである。石や、石組、



図18) 本殿内の石の像。願いを寄せる氏子たちは多い。(愛知県清洲町日吉神社)

岩屋などによせる都市民の自然観との係わりは今後の調査課題である。^{図18)}

4体の石像のサルは、一つとして同じ表情のものでない。サルはどれもが、じっと人を凝視しており、一見無表情にみえるなかでなかなか滋味あふれる姿である。

3) 石のサルの考現学

人口10万の小松市の一角で数多くのサルの石像に出合って強烈な印象をうけたのであるが、それがサルを神使とする神社であることから、このようなサルをモチーフとする文化物の出現も、ごくあたりまえのここのように思えるのであるが、実際に調査をしてみると、そこには、幾多の興味ふかい、日本人と猿との係わりあいの信仰習俗が登場してくるのである。^{図19)}

石川県小松市本折地区にある本折日吉神社にみられた



図19) 本折日吉神社(小松市) 奉納石像 威儀を正すサル

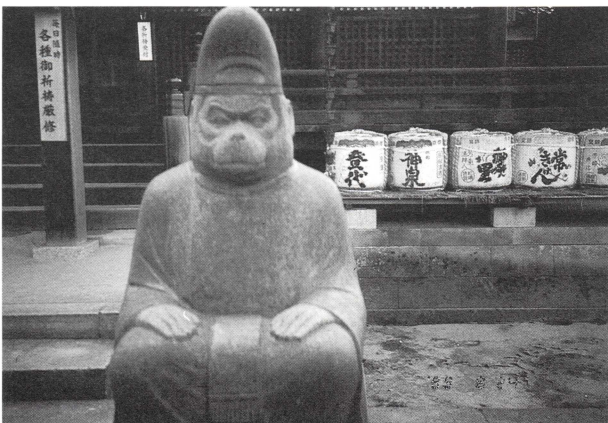


図20) 山王使徒の石猿像。本折日吉神社境内に安置。拝殿正面のサル

サルのモチーフの展開は、同社の長い社歴とその隆盛と係わりまことに多彩な出現をみた。同社の調査は1985年来継続しているのであるが、何故にかかる多彩なサルのイメージが、出現しえたのであるか、この点についての日吉・山王に係わる民間信仰の継承上の信仰自体の受容をめぐる考察が、これまで、十二分になされていないことから、1991年8月同社橋田広一宮司を訪れ、聞き取り調査を試みた。その結果、猿にまつわる奉納造形物につき、幾多の知見をえたので、ここにとりあげ、考察を試みる。^{図20)}もちろん造形奉納物自体のもつイメージ性や、信仰集団の抱く、心性についても触れるものであり、現代社会における都市民の都市空間内の古典的聖域とも目される神社境内・周辺環境における文化モチーフの存在の性格については今後とも検討を加えたいと考える。

まず、本折日吉社の概観をその歴史経過のうちにとらえてみよう。

本折日吉神社のことを地域の住民たちは、「お山王さん」、「日吉さん」と呼んでおり、小松市(石川県)のなかでは知名度の高い社であり、昔から「開運、魔除け、鬼門除け」の神として民間からの期待を受けている。祭神には、大山咋命、相殿神、猿田彦神、えびす神があげられているが、安元年間(1175-1176)の鶴川湧泉寺の合戦の兵火のために、寿永2年(1183)、現在の地に移されていると伝えられているので800余年を経過している。このことは、きわめて重要な点であって、神道系神社の発展の歴史、地域的ひろがり深くむすびついて、動物のモチーフが、シカ、キツネ、ハト、カラス、イヌ、サルが、神使、使徒獣としてくみ込まれている例が多いことから、多種の考察が可能なのである。江戸時代の前田利常のように、この社を祈禱所として、小松、能美の総社と定めたり、代々の城主の崇敬をうけてきたことから、封建領主の社威による地域支配も考えられて、興味ふかい。とくに現代みられるようなさまざまな神を習合し、現世利益を起願する人びとと対応する姿の中に多くのサル象をみ出すことは、信仰集団の信仰受容の一環としてみるべきなのである。

民俗研究家の飯田道夫は、「見ザル聞ザル云ハザル(三省堂撰書)」において「宇宙の中では、微力な存在である人間は、色々なものに加護をたのんできた。その依頼の相手にもサルが入っている」とのべている。サルの霊力

に依存した思いの存在を認めているのである。そのことは、後にふれるが、本折日吉神社の各種のサル像の造られ方、祀られ方、儀礼など、とりあげてみると、それぞれに特色がみられる。しかも、サル像は、その設置年度や、その形態のちがいかからも、歴史・文化財的性格を具備しながら、年月をへてきたのである。いずれにせよ、当社社域におけるサルをモチーフとした造形物はきわめて多彩であり、注目に値する。



図21) 祈願し触れることにより諸願がかなう。「撫でサル」、サル石像。
本折日吉神社境内

神使としてのサルについて本折日吉神社は、神社発行の葉に「魔除三神猿」を取上げ自社における猿について紹介している。

「日吉の神使いとしてのお猿さん、神域には御幣をもつお猿を始め、親子猿、そして、見ざる・聞かざる・云わざる、即ち、悪いものはみない、聞かない、云わない＝良いものを見、良い事を聞き、良い事を云って実行する、という教えをもつ三猿、さらに、社殿欄間に彫られているお猿など、神猿魔去る“マサル”と呼ばれ、神のお使いとしての“猿”であるがゆえに、真猿“シンザル”であり、“マサル”と読み、“マサル”は魔が去る“勝る”で一切の魔を払い去る事を意味し、万福招来繁昌満足を授ける神使いとして尊ばれ、魔除け、厄除け、鬼門除けの信仰として、人びとの心に奥深く溶け込んでいます」と記述している。このことは、すでに、山王宮・本折日吉神社における「猿」の神使としての受容と、当社社信仰の集団をはじめ多くの人びとの祈願のうちに心性的存在としてサルを認めていることを物語るのであって、神社域に多種の猿の造形物が設置されているのも、このよ

うな背景のうえに成立しているのである。

とくに、現代社会において、日常的にいとまされる民間信仰にサルモチーフが、今日に生きつづけている根底にあるものを明らかにしたいと考えるのであるが、人口10万人の小松市において僅か2社のみとされる日吉系神社が、その神社成立の背景に祭神のもつ性格がとりあげられねばならないと考えるものである。すなわち、同社は、国土、産業開発、山嶽経営、植林治水への導示性、諸物産の製法伝授、商工、医療、施薬の技法などに祭神がふかくかかわっているのである。あらゆる人間の生活に必要とされるものについての啓発・指導、守護に係わろうという山王の神の神格に係わっている。すなわち、日本の自然や、環境とのむすびつきの濃厚なものとといえるのであって、このことは山主を自然神、そして、自然の生きもとしての猿への期待とも結びつけがなされる機序となるものと考えている。筆者は、山王の神は日本人の生活に何らかの形で自然とむすびついた指標的存在となってきたと考えている。都市における信仰神域、鎮守の森聖域は、地域住民の信仰としても支持され、ひろがり、中・近世の領域もまた本折八ヶ町の産土神となしたと伝えられている。ここに興味もたれるのは、近代以降のこの社の発展である。

明治8年(1875)本折の郷という、小松地区の橋南一帯の広い地名をとり、社名を本折日吉神社とあらため、明治12年(1937)に県社に昇格している。そして今日、この社は、琴比羅社、市杵神社(弁財天)、下照比咩社、日吉稻荷社を末社として合祀している。このような多くの神々を合祀し、多様な庶民祈願に係わる現世利益の拡大にともなって、山王神使は、ますますその役割りをひろげたと考えられるのであり、山王の使者、猿は、社域におけるイメージ・シンボルとしても、人びとから求められ、とくに氏子、信者からの寄進が、拡大していったのである。とくに近世以後の農林業、醸造業関係者、地場産業生業集団も、この社への関心を示したのであり、橋田正嗣宮司は、“この社は、大変サルを大事にする社である”とのべている。

橋田宮司からの聞き取りによると、これまでのところ、同社では、崇敬者の組織により奉納がおこなわれ、この地域では、41才の厄年の人びとの奉納習慣とむすびついて猿像等の奉納がなされていた。ところが、つぎつぎと

奉納物が増加し、境内もせまくなってきている現状であるが、同社には日吉会、山王青年会が組織されており、内山王青年会も高令化と共に山青会と改称され、奉讃活動が活発になされている。このような、奉仕組織が、数多くのサルモチーフの出現をもたらしたことが、明らかとなったのである。^{図22)}

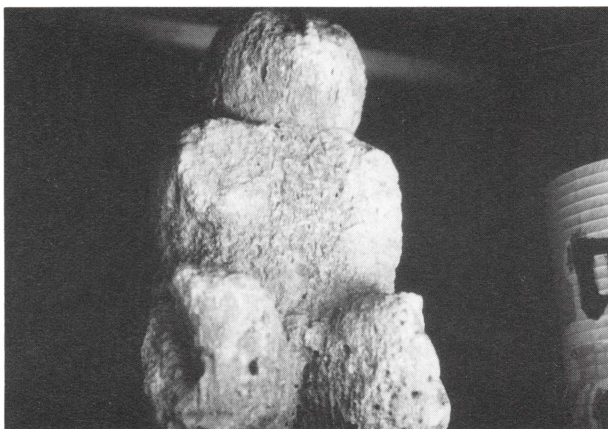


図22) 本折日吉神社氏子たちの奉納祈願は今日に伝えられている。

現在、これらの組織が中心となって神域の活性化がすすめられている。とくに、日吉社が、酒の神様としての信仰が、継承されていることもあって、9月の酒まつりは賑わい、酒造関係者の神社催事への共讃が活発である。

このように、奉讃会、日吉会、山青会等の組織を通じて厄除け祈願、奉納物が、各地から寄せられ、それが、境内安置の猿像として残留しつづけているのである。そして、さらに数々のサルをめぐる民間伝承がさまざまに習合して、サルを通じて山王・日吉社の神威宣舞となったのである。とくに悪魔退散、魔よけという積極的な役割りをサルにもたせた一方において、信仰受容者もまたサルのもつ多様なイメージ性から、多くの評価を付加せしめてきたものといえよう。いわばサルのさまざまな文化物の存在は、地域社会での日吉社の支持の高さを示し

ていると考えている。

本論は、小松市本折日吉社にみられた山王神使、使徒獣としてのサルに焦点をあわせて考察してみたものであるが、山王社は、全国的にひろく存在する。そして多くの社においてサルに係わるモチーフが出現するが、必ずしも、猿のモチーフのない神社も多く存在している。日吉社に猿のモチーフが存在しない事由なども考察されてきているのであるが、猿像その他の存在が、社威の発展と何らかの係わりがあるように思えるのである。^{図23)}



図23) 大野市日吉町日吉神社境内に奉納されたサル像(昭和初期)。サルは尾の長い、サルがつくられている。昭和32年奉納のサルも尾が長い。

現在、完形ではない石のサル像が、小さな屋舎に安置され、信仰の対象となっている点にも注目したい。その名称を「撫で猿」とよび、神猿の取りあつかいをうけている。この石像の猿をふくめて、今日継承されている信仰動態のなかには、自然崇拝と、自然信仰の念が、根底にあるものと考えられる、そして、自然に生きる生きものとしてのサルが、畏敬の対象であり、かつ怖れられると同時に信仰上の期待が寄せられてきたのである。日本人にとってサルとはいかなる動物であるかをめぐり又猿石のイメージの今日受容の文化的性格については引きつづき調査をつづけているものである。

VIII. おわりに—文化としてのサルイメージ

以上、本論において、我国民間信仰の受容とむすびついて、猿を使徒獣としてみる動物観の継承のうえで発顕した猿の石像を、民俗学研究の観点で追究した。日本の自然の中のニホンザルの生命を考えることも今日では重要な課題ではなからうか。そこには、文化人類学での一分野ともいべき、認識としての動物観の解明が必要とされており、猿石の文化として、この点について触れた。そして現代社会における都市における聖域に今日なお設置され、かつ、伝承継承もなされている猿石像について、文化交流・文化変容としてのマツシブ彫刻の国外文化域の文化イメージをめぐる若干の比較も試みた。この点については、今後の比較文化研究が、計画されており、いずれ、報告をしたいと考えている。

本論執筆に当っては多くの情報提供者の御支援をえた。とくに山王・日吉信仰に係わり愛知県南設楽郡鳳来町竹の輪 日吉神社総代田中千代一氏他氏子の方々、山吉田文化研究者 杉本功氏(ふるさと文化学研グループ代表)、愛知県西春日井郡清洲町、日吉神社宮司、三輪康裕氏他氏子の方々、ならびに、石川県小松市本折日吉神社宮司、橋田広一氏の方々に深甚の謝意を呈したい。なおマツシ



図24) 高齢のニホンザル(京都市嵐山自然遊園地)

ブ彫刻をめぐる御教示をえた日本環太平洋学会々長小川光賜氏、会員辻雅周氏および賈鍾寿氏他の方々にも厚く御礼を申し上げるものである。

参考文献

- 1) 飯田道夫 猿よもやま話 評言社 1973
- 2) " 見ザル聞かザル言わザル 三省堂 1983
- 3) 村山修一編 比叡山と天台仏教の研究 名著出版 1975
- 4) 折口信夫 日吉の使わしめの猿 折口信夫全集第2巻 中央公論社 1954
- 5) 景山春樹 神体山—日本の展始信仰をさぐる 学生社 1983
- 6) 景山春樹校注 「耀天記」「神道大系神社編29」 日吉神道協会大系編集会 1983
- 7) 広瀬 鎮 猿神・厩猿と日吉のサルたち—都市の中に緑の空間が残されている 岐阜ふるさと動物通信 第1号 岐阜県哺乳動物調査研究会 1988
- 8) 広瀬 鎮 猿 法政大学出版局 1979
- 9) " アニマルロアの提唱 未来社 1984
- 10) " 日吉神社の尾の長いサル モンキー vol.18 No.136 日本モンキーセンター 1974
- 11) 広瀬 鎮 「アニマル・ロアにみられる日本精神史の特色(1)—猿頭畏敬の伝承論」名古屋学院大学論集第24巻第1号 名古屋学院大学産業科学研究所 1987
- 12) 広瀬 鎮 学院大学論集第24巻第1号 名古屋学院大学産業科各研究所 山王とサル、「モンキーvol.11-2」 日本モンキーセンター 1967
- 13) 広瀬 鎮 猿と日本人 第一書房 1989
- 14) 広瀬 鎮 日吉神社とサル モンキーvol.14-4 No.114 日本モンキーセンター 1970
- 15) 広瀬 鎮 サルの学校 中央公論社 1981
- 16) 広瀬 鎮 アニマル・ロアの地域・比較研究—都市聖境空間におけるニホンザルの民俗—愛知県西春日井郡清洲町日吉神社 名古屋学院大学論集 vol.25 No.4 名古屋学院大学産業科学研究所 1989
- 17) 広瀬 鎮 都市聖域空間におけるニホンザルの民俗—愛知県南設楽郡鳳来町竹の輪村日吉神社、名古屋

屋学院大学論集 vol.27,No.2 名古屋学院大学産
業科学研究所 1991

- 18) 奉賛会 山王宮本折日吉神社 日吉神社社務所
1991
- 19) 本折日吉神社編 山王宮本折日吉神社について 日
吉神社社務所 1991
- 20) 小川良雄 小松市史(3巻) 小松市教育委員
1950-1963
- 21) 福田アジオ 時間の民俗学空間の民俗学 木耳社
1989
- 22) 宮田 登 民俗宗教論の課題 未来社 1977